

靴のデザインにみる戦後史 ③

文・イラスト 神奈川県企業博物館連絡会特別会員 福原 一郎

1960年（昭和35年）戦後の日本経済が高度成長して“黄金の60年代”といわれるようになった、レジャーも盛んになり海外のファッションも多くとり入れられ、婦人靴の爪先もヨーロッパ調のスクエアトゥで、エレガントなヒールがつけられた。

アメリカ東部の大学生の風俗、アイビー・ルックをとり入れた衣服を“みゆき族”といわれる若者たちが好み、帽子から靴まで揃えたスタイルで街にたむろした。

また、1961年（昭和36年）に公開された「ウエストサイド物語」からズックのバスケットシューズが話題になった。

イギリスで女性のミニスカートが発表され世界中に伝わり、婦人靴のヒールは3.5センチ位の太めのものになった。

1962年（昭和37年）シャーベット・トーンのキャンペーンでクールなパステル調の靴もつくられた。

1963年（昭和38年）メンズファッション協会はTPOのテーマを発表、これがあらゆる部門に利用された。

1964年（昭和39年）東京オリンピックが開かれ新幹線が開通し、高層ビルの建設や、道路が整備され国際化の時代となった。ファッションも欧米との交流が活発に行われ、男性の服装の基本は、イギリス調の「ブリテッシュ・スタイル」、アメリカ調の

「トラディショナル・スタイル」、そして、ヨーロッパ調の「コンチネンタル・スタイル」と分類され、靴もそれぞれのスタイルがつくられている。

1965年（昭和40年）日本人のライフスタイルにカジュアル化が浸透し、起毛した甲革に合成スポンジ底をつけたカジュアルシューズが、紳士、婦人、子供とファミリーで履かれるようになった。

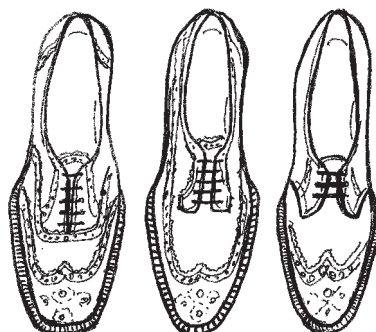
また、ビジネスシューズには国産の人工皮革が用いられた。

1966年（昭和41年）ビートルズの来日で、音楽やファッションと共にサイドゴアのチェルシーブーツが流行した。

1967年（昭和42年）ミニスカートの普及で女性のブーツが多く履かれ、中ヒールの編上ブーツや、ルーズフィットのロングブーツが流行となった。

1968年（昭和43年）スリッポンの飾りに馬具のはみ（ビット）をかたどった「グッチ」の金具が世界的に流行した。

そして、1969年（昭和44年）アメリカの宇宙船アポロ11号が月面に達し、人類最初の第一歩にルナブーツが履かれたことから、スキー場などで“ムーンブーツ”などといわれるアフターブーツが用いられた。



紳士靴の基本型

左から、イギリス調のブリテッシュ・スタイル、アメリカ調のトラディショナル・スタイル、ヨーロッパ調のコンチネンタル・スタイル。

1960—1969

スクエアートウの
婦人靴



アイビー調の紳士靴

編上の婦人ブーツ

ズックのバスケット
シューズ



ルーズフィットの
ロングブーツ



セットバックヒールの婦人靴



チェルシーブーツ



fuku.

起毛甲革・
スポンジ底の
カジュアルシューズ



ビット飾りのスリッポン



月面を歩いた ルナブーツ